

(4) ニューエイジの場合

インタビュー調査では、どの教団でもいくつかの宗教を遍歴してきたという信者に出会う。補教師として熱心に子弟の育成に励んでいる女性サンドラ (41 歳) もその一人である。彼女はカトリックに熱心な養父母に育てられた。小さな頃から教会の礼拝に出席するよう信仰が義務付けられてきたという。長じて彼女はカルデシズムともコンタクトを持ち、その後ニューエイジ的なメッセージに惹かれていった。

子供の頃は、教会に行かないと罪になり、悪魔の災いが降り懸かると教えられていました。私はそれがとても怖かったです。また、身近にはカルデシスタの人たちが多くいて、私は霊媒の能力を持っているから霊媒として活動しなければいけないとも言われてきました。私は人が憑霊するとカトランス状態になることに恐怖を感じていました。大人になっても恐怖心がなくなることはありませんでした。

彼女の入信経緯は次のようである。

小さい頃、私は実の母親から育ての母親に渡されたそうです。私に娘が生まれて、実の母親のことを聞かされました。実母はシングルマザーで私を生んだのですが、私もそうだったんです。私は経済的な面だけではなく精神的にも非常に辛い思いをした時期がありました。そのことが原因で知り合いの女性が PL の教会を紹介してくれました。ある日、私は補教師に、「サンドラ、あなたの娘をあなたのようにしてもいいの」と言われたのです。娘には私と同じようになって欲しくないと思いました。娘には幸せな家庭で子供を育てて欲しいと思いました。

PL では、「家の流れ」という教えがあって、ある人に起こったことはその人の子供たちにも伝わるといいます。だから、私は「家の流れ」を最大限に切って子どもには伝えたくないと考えました。PL の教えは、心の持ち方や考え方が病気や災難を引き起こすと説いています。そのような考え方は、ポジティブシンキングの本ですでに知っていました。ですから、PL の教えはすぐに理解できました。そのうえ、PL では詳しくオリエンテーションをしてもらえるので、私は PL の教会に通うようになったのです。一人で本を読んでいる間は、自分で身につけた考え方をどのように実行すればいいのか指導してくれる場所がありませんでした。

彼女は、ニューエイジ的な思考を読書で身につけていたが、PL 教会に通うようになってはじめて実際に実践できる場所を得たと感じた。ここでアメリカ創価学会の事例研究を行ったハモンドとマハチェクの議論を参照したい。彼らは、創価学会に改宗した人びとが元来「超近代的」な性向を持っており、入信以前から東洋文化にたいする関心が高かったと指摘する。「超近代的」という用語は彼らの分析を精査する限り、筆者が用いる「ニューエイジ的」という意味である。

彼らは次のように述べる。「創価学会に関与することによって、以前はゆるやかな一連の社会的態度であったものが体系化され、入会以前に抱いていたパターンが鮮明なものとなるのである。その結果、以前にもある程度存在していた世界観が首尾一貫し

たものとなり、聖なる意味を賦与される。したがって改宗とは、すでに抱かれていた社会的価値観を表現し、それらと同じような精神を持つ他者との交際によって強化し、さらにそれらを仏教の宗教的伝統の中で正当なものとして認知することなのである (ハモンドとマハチェク 2000: 181)。」この議論をもとにサンドラの入信事例を論ずるなら、彼女はニューエイジに関するゆるやかな一連の知識を PL で体系化することで首尾一貫した世界観を体得するようになり、教会における他者との交流のなかで自らが依拠する信念体系を正当化したといえることができる。

さて、彼女の場合、入信のきっかけが PL におけるニューエイジ的な思想の連続性にあったにせよ、その信仰を深めたのは「家の流れ」という教えだった。娘にも同じ思いをさせたくないという願いが彼女を後押ししたのだった。そして、彼女は「家の流れ」を良くするために先祖祭祀に参加するようになった。先祖祭祀はどの教会でも毎月 11 日の「先祖の日」に行われており、普段でも礼拝対象の「日章」を通じて先祖に感謝を捧げるよう促されている。

祖先への祈りは PL で学んだのですが、それは祖先に対して感謝の気持ちを持つということなんです。私の人生はそれによって変えることができました。祖先をお祈りしながら、私たちが「今・ここ」にすることができている、ということを感じることがになりました。先祖の日の祈りで、やがて私たちはある決心をするようになるのです。つまり私たちがいずれ感謝されるようにならなくてはいけないのだから、それなりの行動をしなければならない、責任のある行動をとらなくてはならない、ということです。また、祖先に感謝をするだけでなく、祖先が持っていた不徳を神様にお詫びすることも大切だと教えられています。家の流れは、それによって清められていきます。それが私の娘の将来をも良くしてもらえることに繋がっていくのです。

彼女の説明によれば、PL の先祖祭祀では死者の靈魂を敬うこともさることながら、今ある自分の振る舞いを正しくすることを重視していることがわかる。非日系ブラジル人の一人の教師は次のように語る。「あらゆる過去の事柄は現在に反映して起こってきている。現在起こっているあらゆる事柄は将来に反映する。PL の教えは、将来は現在にあるということを教えている。だから、現在をいかに生きるということが大切になってくる。」

カルデシズムの教えを知っているサンドラは、災厄に苛まれる原因は輪廻転生による過去の負債にあり、それを慈善活動等の実践によって支払われ限り自分の負債 (災厄の原因) は消え去らないとも考えていた。その意味で、救済を求める心は過去を向いていたといえる。しかし、PL の教えによってその志向性は今という時点に向くようになった。それは、「今・ここ」の救済への志向というニューエイジのトレンドと軌を一にしている (Vol.15 No.2)。

[参考文献]

ハモンド・フィリップ、マハチェク・デヴィッド『アメリカの創価学会—適応と転換をめぐる社会学的考察』栗原淑江訳、紀伊國屋書店、2000 年。